

W.M. Vories 作詞、K. Wilhelm 作曲、D.B. Towner 編曲

Doshisha College Song のルーツ

1. はじめに

同志社には Doshisha College Song、同志社大学歌、同志社校歌など、幾つかの校歌があるが、最初に作られ、重要な場面で広く歌われているのが”Doshisha College Song”である。作詞は W.M. ヴォーリズであるが、メロディはドイツからアメリカを経由して日本に伝えられたもので、作られたきっかけには同志社グリークラブ員の存在があった。

2. Doshisha College Song が作られた経緯

同志社は 1875（明治 8）年、新島 襄が創立した同志社英学校にはじまり、ここにグリークラブ（男声合唱団）が作られたのは 1904（明治 37）年である。当時、学生であったクラブの創設者 片桐 哲氏（後に同志社女子大学初代学長）を中心とする音楽好きの学生たちが、先生方に校歌がほしいと申し出た。これを受けて、当時、学生たちにエール大学の Song Book を使って合唱を教えていた教授で宣教師のギュリック（Sidney Lewis Gulick）氏（1860～1945）が、1908（明治 41）年に京都に建築設計事務所を開き、同志社の先生たちと懇意にしていたヴォーリズに作詞を依頼した。

作詞は 1908 年に行われ、メロディはアメリカのエール大学の校歌 “Dear Old Yale” が使われた。それは当時、同志社にエール大学出身の宣教師や教員が多くおられたからだと考えられている。翌 1909 年、同志社はこれを校歌に制定した。現在、グリークラブが歌っている男声四部合唱の楽譜を付図 1. に示す（資料(1),(2),(3),(4)）。

なお最近の調査で、私見ではあるが、ヴォーリズが来日前、すでにこのメロディを別の歌（Make Jesus King）で知っていた可能性があることが分かった（資料(15)）。

3. 作詞者 ヴォーリズ

William Merrel Vories（1880～1964）の主な経歴と関連事項を、表 1. にまとめて示す（資料(5),(6),(7)）。

彼はアメリカのカンザス州で、父ジョン、母ジュリアの間の長男として生まれた。幼い頃から病弱だったため、8 歳の 1888 年、アリゾナ州フラグスタッフへ転地療養のために移った。ここで彼は、雄大な自然に感化を受けて育ち、絵画や音楽に親しんだが、特に音楽的な才能に目覚めた。

表 1. ヴォーリズの経歴と関連事項(1/2)

年月日	ヴォーリズの経歴	関連事項
1636.		ハーバード大学創立
1701.		エール大学創立
1843.		新島 襄誕生
1854. 6.11. (安政 1 年)		Karl Wilhelm が”Die Wacht am Rhein” を男声合唱で初演
1858.		ハーバード大学グリークラブ創立
1860. 4.10.		ギューリック誕生
1861.		エール大学グリークラブ創立
1868.		明治維新
1875.11.29.		新島 襄、同志社英学校を創立
1876.		新島襄、八重と結婚(1 月) D.W.ラーネッド同志社教員に (4 月)
1879.10.		文部省内に音楽取調掛を設置
1880.10.28. (明治 13 年)	米国カンザス州で生まれる	
1881. (明治 12 年)		H.Duran が Dear Old Yale を作詞し て Die Wacht am Rhein のメロディに 乗せ、エール大学の校歌とした
1887.秋		ギューリック来日
1888. (明治 21 年) (8 歳)	病弱のため転地療養で、アリゾ ナ州フラグスタッフに転居	E.Brock の歌詞を D.B.Towner が Die Wacht am Rhein のメロディに乗せ、男 声四部の MAKE JESUS KING に編曲
1889.12. (明治 22 年)		Die Wacht am Rhein のメロディに里見 義が作詞した「火砲の雷」が、中等唱 歌集として東京音楽学校から出版
1890.1.23.		新島 襄死去
1894. (明治 27 年)		楽譜集“Towner’s Male Choir”出版 日清戦争勃発(8/1)~1895.4.17 まで
1896.	コロラド州デンバーに転居	
1900. (明治 33 年) (20 歳)	イーストデンバー高校を卒業 し、建築家を目指してコロラド 大学に入学、YMCA 活動開始	

表 1. ヴォーリズの経歴と関連事項(2/2)

年月日	ヴォーリズの経歴	関連事項
1902. (明治 35 年) (22 歳)	SVM 第 4 回世界大会に大学代表 で参加し、外国伝道への献身を 決意して哲学科に転入	日英同盟締結 (1921 年まで)
1904. (明治 37 年)	コロラド大学哲学科を卒業し、 コロラドスプリングス YMCA の 主事補となる	同志社グリークラブ創立 日露戦争勃発(2/10)～1905.9.5 まで
1905. 2. 2. (明治 38 年)	滋賀県立商業学校に英語教師と して着任	日露戦争終結
1906.		ギューリック同志社教授に就任
1907.3.20.	キリスト教伝道を理由に解職	
1908.10. (明治 41 年)	京都で建築設計事務所を開設 ギューリック教授の依頼で Doshisha College Song を作詞	ギューリック、ヴォーリズに Doshisha College Song の作詞を依頼
1909.	同志社が上記の歌を校歌に制定	
1910.1～11. (明治 43 年)	ヨーロッパ経由で帰米、メンソレ ターム創業者ハイドに出会う。 建築家チャービンを伴い帰日	
1912.4.		同志社大学開校
1913.3	病氣療養のため帰米して手術、	ギューリック、病気のため帰米(7 月)
1914.3.14.	永住する両親を伴い帰日	
1919.6.3.	一柳満喜子と結婚	ラーネッド同志社大学第 2 代学長に就任
1921. (大正 10 年)		M.Bartholomew がエール大学グリー クラブの Director に就任、1953 年まで
1927.1～3.		ギューリックが青い目の人形を贈る
1928.		ラーネッド、同志社を退任して帰国
1934. (昭和 9 年)		Bartholomew がエール大学校歌の斉 唱と合唱の楽譜をあらためて編集
1941.	帰化して、日本国籍取得	日米開戦 (12 月 8 日)
1945. (昭和 20 年)	マッカーサーと近衛文麿の会見 の仲介工作を行う	敗戦 (8 月 15 日)
1964.5.7.	近江八幡の自宅で死去、83 歳	東京オリンピック(10 月 10 日～)

幼い頃から、20歳年上の母の姉の娘（従姉）カーリーが弾くピアノを聞いているだけで機嫌のよい子供であった。4歳のときに両親に連れられて初めて教会へ行き、パイプオルガンと聖歌隊の合唱を聞いて感動したと言われている。

転居先のアリゾナ州フラッグスタッフでは、1年遅れて小学校に入るとピアノを弾きはじめたが、練習が好きではなかった。しかし、楽譜が読めるようになると即興でも弾けるようになり、自習で讃美歌を弾くとともに、作曲や作詞の才能も発揮し始めた。この頃、地元の学校や教会でオルガンを弾くようになっていた。

より良い教育環境を求めて16歳の1896年にコロラド州デンバーに転居し、イースト・デンバー高校に入った。高校では音楽クラブの創立に参加して音楽に熱中し、地元の教会のオルガニストとして奉仕した。

1900年に高校を卒業し、建築家を目指してコロラド大学に入った。ここでも音楽的才能を磨く一方、学内のYMCAと海外宣教学生奉仕団（SVM－Student Volunteer Movement for Foreign Mission）の活動に熱心に参加した。1902年、カナダのトロントで開かれたSVMの第4回世界大会にコロラド大学代表として参加し、テイラー女史の講演に感激して建築家への夢を捨てて、外国伝道に身を捧げることを決意した。3年生から同じ大学の哲学科に転じて1904年6月に卒業したが、在学中に最初の詩集を自費出版している。大学卒業後は、コロラドスプリングスYMCAの主事補になった。

1905年1月に来日して、2月2日に滋賀県立商業学校（現滋賀県立八幡商業高等学校）の英語教師に着任したが、彼のキリスト教伝道に対して仏教徒が多い地元からの強い反発から、1907年3月に英語教師を解任された。失職しながらも彼は伝道を続けていたが、京都YMCAの会館建設に関連して、現場の代理監督を依頼された。これは、設計者のドイツ人デ・ラランデ(G. de Lalannde)が東京にいたからで、これを機会に1908年10月、京都三条にあったYMCAの一室に建築設計事務所を開いた。

京都で建築の仕事をしている間に、同志社に出入りしている間に、教授で宣教師のギューリックから依頼されて、“Doshisha College Song”を作詞した。これまで説明したように、ヴォーリズは幼い頃から音楽に親しみ、詩心もあったので、同志社からの依頼によるCollege Songの作詞も、比較的容易にできたものと考えられる。

その後は英語教師、キリスト教伝道家、建築家、メンソレタームの事業家・・・など、太平洋戦争を挟んで多彩な活動をして、大戦直前の1941年に日本に帰化した。

その間の彼は同志社との関係も深くなり、アーモスト館や啓明館を設計したが、活動や経歴については多くの資料があるので、それらを参照していただきたい(資料(5),(6))。

このように、彼は来日した頃には音楽と詩についての深い知識を持っていた。また、1910年にはアメリカでの讃美歌創作（作詞）に応募して採用され、あるメロディが付けられて歌われていた。後に自身がこれにメロディを付け、1931年に日本の讃美歌236番「神の国」として採用された、(資料(5),(7))。

4. 作詞の依頼者 ギューリック

Sidney Lewis Gulick(1860～1945) は 1860 年 4 月 10 日、マーシャル諸島のエイボン(Abon)に生まれ、カリフォルニアで高校を卒業後、1883 年にダートマス大学を、1886 年にユニオン神学校を卒業した。1887 年 9 月、高校時代からの友人であったカラ M. フィッシャーと結婚した。彼らの家系には多くの海外宣教師がいたため、結婚直後に日本に渡り、伯父・伯母がいた熊本で宣教活動を始め、1896 年まで滞在した。1896～1897 年に一時帰国してアンドーバ神学校などで研修を受け、1897 年には再び来日して 1904 年まで松山で伝道に従事した。

彼は同志社で教鞭をとることになり、京都で研修を受けて一旦帰国し、アメリカ、ドイツで研さんを続けた後、1906 年に同志社の教授に就任した。翌年からは京都大学文学部講師も兼務した。彼は学究的で日本語も堪能だったので、日本語でも著作を行った。1912 年に癌の手術を受けた後、健康がすぐれなかったため、1913 年に同志社を休職して帰国した。帰国の船中で「日米両国の平和のために余生を捧げて働け」との天命を感じ、病氣も回復したことから、カリフォルニアに吹き荒れる排日の嵐を鎮めるため活動した。1915 年と 1922～1923 年に来日して帰国後、「世界児童親善委員会」を設立し、1927 (昭和 2) 年のひな祭りに合わせ、1～3 月にかけてアメリカの子供たちから日本へ「青い目の人形」を贈る活動を進めた。このような彼の努力も空しく日米間に戦争が始まり、彼は 1945 (昭和 20) 年 12 月 20 日、アイダホ州で 85 年の生涯を終えた。次男リーズ (Leeds, 1894～1975) も、宣教師として来日している (資料(8),(9))。

5. Doshisha College Song のメロディ

歌が作られる場合は先に歌詞があり、これにメロディを作曲するのが一般的であるが、この College Song では先にメロディが与えられ、それに合わせて歌詞が作られた。作詞を依頼したギューリックは、グリークラブの指導に使い、エール大学の校歌が載っている Song Book をヴォーリズに見せたものと思われる。逆に、依頼されたヴォーリズは非常に光栄に感じ、自らエール大学の校歌のメロディを提案し、同志社教員のカーブ (C.S.Cobb) もそれに同意したとも言われている(資料(13))。

(1)エール大学の校歌 ” DEAR OLD YALE”

エール大学は 1701 年の創立で、グリークラブは 1861 年にできたが、それ以前から学生たちは歌を歌っていたので、Song Book が作られていた。最古のものは 1853 年の出版で、1855 年に第 2 版が出た。それらのうち、アメリカで電子書籍として公開されている最古のものは 1858 年に出版された”SONG OF YALE”である。これには歌詞だけが掲載されていて、楽譜は載っていない (資料(10))。

”Doshisha College Song” のメロディの元は、1881 年に作られた”DEAR OLD YALE” である。これは当時、大学 4 年生だった H.Duran がグリークラブのために

作詞したもので、メロディにはドイツで 1854 年に作られた歌 “Die Wacht am Rhein” (ラインの守り) が使われている (資料(13))。

これができた翌年の 1882 年に出版された Song Book の”YALE SONGS” には全曲の楽譜が掲載されており、”DEAR OLD YALE” は男声四部合唱になっている。その表紙と目次を図 1. に、楽譜を付図 2. に示す。楽譜の作曲者欄は”Music by Carl Wilhelm”となっていて編曲者が書かれていないので、ドイツの楽譜のままである可能性が高い。調性は、変ホ長調である (資料(11))。

YALE SONGS.

INDEX OF TITLES.

A COLLECTION OF SONGS IN USE BY THE

GLEE CLUB AND STUDENTS OF YALE COLLEGE.

COMPILED AND EDITED BY

FRANK B. KELLOGG,

President of the Yale Glee Club of '83.

AND

THOMAS G. SHEPARD,

Musical Director of the Yale Glee Club since '73.

NEW HAVEN, CONN.:

PUBLISHED BY SHEPARD & KELLOGG.

1882.

	PAGE		PAGE
A, B, C	76	Lorelei	34
Air from "Puritani"	46	March	90
Amici	38	Matin Bells	53
B-a Ba	70	Mermaid	23
Bill of Fare	85	'Neath the Elms	66
Bingo	11	Nelly was a Lady	22
Black Brigade	20	Nut Brown Maiden	26
Bohunkus	43	O'Hoolihan	42
Bold Fisherman	18	Old Ark	65
Bonnie	10	Old Brick Row	84
Bugle Song	96	Old Cabin Home	32
Bull Dog	24	Old Mountain Tree	35
Bst, Bst	27	Olivette Warble	52
Captain James	33	Peter Gray	19
Chinese Song	29	Polly-Wolly	25
Ching-a-ling	12	Pope	28
Church in the Wildwood	31	Raven	39
Come, Rally I	50	Schneider	61
Daylight	60	Serenade	93
Dear Old Yale	95	Sister and I	21
Drinking Song	36	Society Song	94
Dutch Company	57	Soldier's Farewell	14
Eli Yale	7	Son of a Gambler	44
Fairy Moonlight	30	Spoon Song	81
Gaudeamus	48	Stars of the Summer Night	41
George Washington	62	Swanee River	15
Hoarse Singers	88	Switzer Boy	55
Humpty Dumpty	72	Tarpaulin Jacket	17
Integer Vittæ	47	Toast	49
Ivy Song	40	Twilight	9
Jolly Life	51	Updee	8
Lady, let the rolling drums	98	Wake, Freshman, Wake I	37
Last Cigar	16	Waltz	99
Lauriger	49	We meet again to-night	80
Little Dog	58	When the Moonlight	94

図 1. 1882 年に出版された Song Book ”YALE SONGS”の表紙と目次

目次の中ほどに、”DEAR OLD YALE” がある。その後、曲名が歌詞の最初の言葉をとって”Bright College Years” に改められたが、その時期や理由は分からない。1906 年に出版された”THE YALE SONG BOOK” には”Dear Old Yale” の曲名で 1 曲目に掲載されているので、変更されたのはそれ以降である (資料(11))。

現在の”SONGS OF YALE” 16 版には、”Bright College Years”の斉唱と男声四部合唱の 2 種類が掲載されている。これらは 1921 年にグリークラブの Director に就任した M.Bartholomew が 1934 (昭和 9) 年に編集したもので、このときに曲名が変更された可能性も考えられる。その男声合唱の楽譜を付図 3. に示す。付図 2. と比べると、調性が変ホ長調から半音低い二長調に移調されている。なお、斉唱は変イ長調である (資料(12))。

このメロディが **Doshisha College Song** に使われたのは、「当時の同志社にエール大学出身の教員が多くいたためだ」との説がある。当時の主な外国人教員は表 2 の通りで、1876 年から新島 襄を助けたラーネッドは確かにエール大学出身であるが、卒業したのは 1873 年なので在学中に”DEAR OLD YALE” はまだできておらず、聞いていない。創立時から教えていたデイヴィスもヴォーリズに作詞を依頼したギューリックもエール大学出身ではない。したがって、この説には疑問を感じる。同志社大学神学部の本井 康博教授も、講演の中でこの説を明確に否定されている(資料(13))。

表 2. 校歌が作られた時期の同志社英学校の主な外国人教員

氏 名	生・没年	在任期間	卒業大学	卒業神学校
新島 襄	1843~1890	1875~1890	アーモスト	アンドーヴァ
Jerome Dean Davis	1938~1910	1875~1910	ピロイト	シカゴ
Dwight Whitney Learned	1848~1943	1876~1928	エール	
Marquis Lafayette Gordon	1843~1900	1877~1899	ウェインズバーグ	アンドーヴァ
Daniel Crosby Greene	1843~1913		ダートマス	
Frank Alanson Lombard	1872~1953		アーモスト	
C.S.Cobb			アーモスト	
Sidney Lewis Gulick	1860~1945	1906~1913	ダートマス	ユニオン
Otis Cary	1851~1932	1892~	アーモスト	アンドーヴァ

(注) ヴォーリズが近江八幡の県立商業学校の英語教師を解任されて京都に移ったとき、F.A.Lombard の家に寄宿し、J.D.Davis 邸で食事を食べていたと言われている(資料(13))。

(2) ドイツ (プロイセン) の歌 ”Die Wacht am Rhein” (ラインの守り)

ドイツの前身プロイセンとフランスがライン川を挟んで対立していたことから、この地を守ろうとして Max Schneckenburger(1819~1849)が 1840 年に書いた詩に、スイスのオルガン奏者 J.Mendel が作曲したが、あまり歌われなかった。1854 年に Karl Wilhelm(1815~1873) が作曲にして彼の男声合唱団が歌ったところ、ドイツで広く愛唱されるようになった。メロディが勇壮で、馴染み易かったからだと思われる。それがアメリカに伝わって、エール大学の校歌のメロディになった。

最初の楽譜は分らないが、1920 年に出版されたドイツの男声合唱曲集の楽譜は付図 4.のようになっている。これを付図 2.の”Dear Old Yale” と比べると、調性を含め、ほとんど同じである(資料(14))。

したがって、”Dear Old Yale” は”Die Wacht am Rhein”の楽譜をほぼそのまま使い、歌詞だけを入れ替えて作られたと考えられる。

(3) 中等唱歌集「火砲の雷」(ほづつのらい)

このメロディは早くから日本に伝わっていて、尋常中学校の音楽のために 1889 年 12 月、東京音楽学校が編纂した「中等唱歌集」の中にこのメロディを使った歌がある。それは第 14 番の「火砲の雷」で、その楽譜を、付図 5 に示す。このメロディは **Doshisha College Song** が作られる 20 年も前に日本に伝わっていたことになるが、この事実はあまり知られていない。なお、楽譜には作詞(歌)者名も作曲者名も書かれていない(資料(15))。

この唱歌集には、その後も歌い継がれてきた第 1 番の「君が代」をはじめ、「紀元節」、「天長節」、さらに第 15 番には「埴生の宿」が収録されている。この「埴生の宿」は里見 義の名訳詞(作詞)で、今も広く歌われている。

(4) 少年唱歌第五編、第十「墳墓の国」

納所弁次郎(1865~1936)と田村虎蔵(1873~1943)が編集した「教科統合 少年唱歌、全八冊」が、1903(明治 36)年 4 月から 1905(明治 38)年 10 月にかけて、十字屋から出版された。これらは、高等小学校(現在の小学校 5 年~中学校 2 年)の生徒を対象にしたもので、第五編の 10 番に掲載された「墳墓の国」が”**Die Wacht am Rhein**”のメロディを使った歌である。楽譜はメロディだけで、「作曲 ウィルヘルム氏、作歌 旗野士良」と書かれている。楽譜を付図 6.に示す(資料(16))。

(5) Doshisha College Song の男声合唱の楽譜

これが制定された当初、斉唱か合唱かなど、どのような形で歌われていたかわかっていない。ただ、作詞を依頼したギュリックが 1906 年に同志社教授に就任してグリークラブを指導していた時には、1882 年に出版されて”**DEAR OLD YALE**”が掲載された”**YALE SONGS**”を持っていた可能性が高く、ギュリックはこれを見せながら、ヴォーリズと打ち合わせたものと思われる。

一方、現在グリークラブが歌っている男声合唱の楽譜は付図 1.のもので、ハ長調であり、合唱の構成も”**DEAR OLD YALE**”とは異なっている。この楽譜が採用された経緯の記録は無いが、編曲者として **D.B.Towner** の名前が記されていることが重要な手掛かりになる。

ヴォーリズが作詞の過程で **Towner** に編曲を依頼した情報は無いが、この楽譜が **Towner** が編集して 1894 年に出版された男声合唱曲集”**Towner’s Male Choir**”に掲載されている”**MAKE JESUS KING**”に調性を含め限りなく近いことが、同志社グリークラブ OB の脇地氏から指摘されている。この楽譜を、付図 7.に示した(参考資料(17),(18))。

この **D.B.Towner** (1850~1919) は、アメリカの **Gospel Song** (キリスト教福音派の讃美歌) の作曲家で、歌手でもある。

この男声合唱曲集は同志社グリークラブの学生指揮者の間に古くから伝わって

いて、”K. Katagiri” のサインが入っている。サインが“T. Katagiri “ ならば
グリークラブ創立者 片桐 哲氏の所持品であったことになるが、名前の頭文字が
”K”なので、同じく同志社グリークラブにいた片桐 哲氏の弟（総、弘）でもなく、
他の親類縁者のものかもしれない（資料(19),(20)）。

College Song を本格的な男声四部合唱で歌いたいと考えたグリークラブ員が
ある時、身近にあった”MAKE JESUS KING”の楽譜を見て、メロディが全く同じ
であったことから、この楽譜に歌詞を当てはめて歌ったのかもしれないが、この楽
譜が使われた経緯は謎のままである。

(6) ヴォーリズが作詞前からこのメロディと楽譜を知っていた可能性

”MAKE JESUS KING”の楽譜の上段には、次のような注書きがある。

Written for the student's foreign missionary movement of the American
Intercollegiate Young Men's Association, Northfield Mass. 1888

この意味は、次のとおりである。

「マサチューセッツ州ノースフィールドで 1888 年に開催された、
全米大学 YMCA の学生による海外伝道運動のために書かれた」

また、この楽譜が掲載されている男声合唱曲集の序文には

”・・・believing it to be most helpful accessory in the service of praise, more
especially for Y.M.C.A., Y.P.S.C.E, and Evangelistic meetings” すなわち、
「これは讃美の礼拝、特に YMCA, YPSCE や福音伝道のための集会に大いに役立つ
と信じている」と書かれていて、これは SVM や YMCA 活動のための歌集である。

ヴォーリズは学生時代から趣味で賛美歌の楽譜を集めていたと言われており、
さらに SVM や YMCA の活動に熱心に参加していたので、その頃からこの合唱曲集
を持ち、この”MAKE JESUS KING”を聞いたり歌ったりして熟知していた可能性
が十分、考えられる。そうであれば、彼が作詞したとき、“Dear Old Yale”ではなく、
この”MAKE JESUS KING”の楽譜を書き写し、それに歌詞を書き込んだ可能性が
無いとは言えない(資料(21))。

一方、3.項で説明したように、ヴォーリズは大学在学中の 1902 年、カナダの
トロントで開かれた第 4 回「海外伝道学生奉仕団」の世界大会にコロラド大学代表
として参加し、そこで聞いた講演に感動して、外国伝道に身をささげることを決意し
ている。したがって、彼はその大会でこの歌を聞いたか歌った可能性が考えられるが、
この大会で使われた讃美歌集には、この歌が収録されていない（資料(22)）。

さらに、ヴォーリズが来日したとき”Towner's Male Choir”を持ってきていて、
彼の遺品の中に残っているかもしれないと考え、近江兄弟社に問い合わせた。その
結果、これは無く、残されている男声合唱曲集は ”Rodeheaver Collection for Male
Voice” の 1 点だけであった。なお、これは 1916 年に”The RODEHEAVER

HALL-MACK Co.”から出版されたもので、全 160 曲中に”MAKE JESUS KING”は収録されていない(資料(23),(24))。

6. Doshisha College Song 成立過程の一つの可能性 — 筆者の仮説

これまでの調査により、College Song の成立過程の中で幾つかの疑問が残ったが、上記の各項で説明した状況証拠を総合すると、次のような可能性が考えられる。

- (1) ヴォーリズは YMCA の活動を通じて、学生時代から”Towner’s Male Choir”の男声合唱曲集を持っていて、”MAKE JESUS KING”を熟知しており、しかもこのメロディがエール大学の校歌と同じであることも知っていた。
- (2) ヴォーリズが校歌の作詞を依頼されたとき、そのメロディに”DEAR OLD YALE”のメロディがふさわしいと考えて、自ら提案した。
- (3) ヴォーリズは、”DEAR OLD YALE”よりも”MAKE JESUS KING”の楽譜の方が男声合唱として優れており、しかも歌い易いと考えて、この楽譜を写しとり、それに歌詞を付けた。
- (4) ヴォーリズが楽譜を書き写す過程で、5 小節のセカント・テノールと 7 小節のベースの音を写し間違えたか、あるいは意識的に変更した可能性がある。
- (5) 1908 年にヴォーリズが作詞を終え、これが 1909 年に校歌に制定された後、彼は”Towner’s Male Choir”の歌集をグリークラブ員に譲り渡した。
- (6) 同志社グリークラブは、1913 年 5 月 24 日に「ザ・ビューティフル・ランド」を歌っている。これは戦前から愛唱されてきた「希望の島」の原曲 ”That Beautiful Land”で、楽譜は”Towner’s Male Choir”の P115~116 に掲載されているが、Yale Songs など他の合唱曲集には載っていない。この事実は、”Towner’s Male Choir”を 1913 年には同志社グリークラブが使っていたことを示している。当時、グリークラブ員が自分でこれを購入することは難しいと思われるので、ヴォーリズから譲られたと考えるのが自然である。その時期は、1909~1912 年頃である(資料(25))。

7. 謝辞

今回の調査にあたり、1959 年卒業の同志社グリークラブ OB 脇地 駿氏のホームページやメールによる私信などから、多くの貴重な情報を提供していただきました。心から、お礼を申し上げます。

8. 付録

(1)付図 1. : 同志社グリークラブが歌っている男声四部合唱の楽譜。

1996 年 10 月 20 日開催の「東西の青春・三重に集う／男声合唱によるコンサート」の楽譜集より

- (2)付図 2. : 1882 年出版の”YALE SONGS” に掲載されているエール大学校歌
 “DEAR OLD YALE” の男声合唱の楽譜
- (3)付図 3. : エール大学の校歌 ”Bright College Years” の男声合唱の楽譜、
 エール大学の愛唱歌集 ”SONGS OF YALE” 16 版より
- (4)付図 4. : ”Die Wacht am Rhein” (ラインの守り) の楽譜、
 “Liederschatz für Männerchor 75 beliebte Chorlieder ,C.F.Peters 1920
 の P39~40 に掲載されている。
- (5)付図 5. : 「火砲 (ほづつ) の雷 (らい)」の楽譜、近代デジタルライブラリー
 「中等唱歌集」、国立国会図書館ホームページ
- (6)付図 6. : 「墳墓の国」の楽譜、『教科統合 少年唱歌』全八冊」のホームページ
- (7)付図 7. : ”MAKE JESUS KING”の楽譜。 ”Towner’s Male Choir”の P 3 に掲載
 されている。2009 年 12 月にアメリカの古書店から購入。
 現在は、The Internet Archive で閲覧可能。

8. 参考資料

- (1)伊東恵司「同志社人の魂—Doshisha College Song」、同志社大学通信 No.170,
 2012 April、脇地 駿氏提供
- (2)渋谷昭彦「同志社のうた解説 (1) Doshisha College Song」同志社グリークラブ愛唱
 曲集 One Purpose より、脇地 駿氏提供
- (3)森田 秀夫「Doshisha College Song 2 題」、同志社グリークラブ 100 周年記念誌
 エピソード 100、P 9、脇地 駿氏提供 「の楽譜集
- (4)1996 年 10 月 20 日開催の「東西の青春・三重に集う／男声合唱によるコンサート」
- (5)奥村直彦「ヴォーリズ評伝—日本で隣人愛を実践したアメリカ人」
 2005 年 8 月、港の人出版、三重県立図書館所蔵
- (6)「年表で見るヴォーリズ」、W. M. ヴォーリズ・ライブラリのホームページ
- (7)「音楽家ヴォーリズ#1～#6」一粒社ヴォーリズ建築事務所のホームページのコラム
- (8)茂 義樹「シドニー・ギュリックについて —排日法案をめぐって— 」
- (9)Sidney Gulick, Wikipedia
- (10)SONGS OF YALE,1858、The Internet Archive, <https://archive.org/>
- (11)YALE SONGS, 1882、THE YALE SONG BOOK,1906、
 The Internet Archive, <https://archive.org/>
- (12) エール大学の愛唱歌集 ”SONGS OF YALE”、16 版
- (13) 本井 康博「同志社カレッジソング百年—新島 襄と W.M.ヴォーリズ、
 同志社大学キリスト教文化センター講演録 (2008 年 11 月 5 日)

- (14) Liederschaz für Männerchor 75 beliebte Chorlieder ,C.F.Peters 1920
アマゾンのドイツ語サイトで、2014 年 12 月に購入
- (15) 「東京芸術大学百年誌、東京音楽学校編第 1 巻」、三重県立図書館所蔵
- (16) 『教科統合 少年唱歌』全八冊」のホームページ
- (17) “Towner’s Male Choir No.1.2.3.4 by D.B.Towner” ,Fleming H. Revell Company
アメリカの古書店から購入。現在は The Internet Archive で閲覧可能
- (18) 脇地 駿「男声版カレソンの編曲について」、さえらのすしのホームページ
<http://www.est.hi-ho.jp/wakky1205/revicing/towner.html>
- (19) 脇地 駿氏からの、2014 年 8 月 12 日付け私信
- (20) 同志社校友会岩手支部「片桐清治生誕 150 周年記念～片桐清治・哲父子顕彰」
- (21) 柴田英夫「同志社と音楽とヴォーリズ」、ヴォーリズ・メモリアル in 近江八幡、
W.M.ヴォーリズ没後 50 年記念、柴田英夫さん講演会、2014 年 10 月 25 日
- (22) ”Student Volunteer Hymnal:Fourth International Convention,Toront,1902”
Internet Archive: Digital Library of Free Books, <https://archive.org/>
- (23) 公益財団法人近江兄弟社本部事務局 藪 秀実氏からの 2014 年 5 月 30 日付け私信
- (24) ”Rodeheaver Collection for Male Voice” Edited and compiled by
Dr. J.B.HERBERT, The RODEHEAVER HALL-MACK Co.
Internet Archive: Digital Library of Free Books, <https://archive.org/>
- (25) 「同志社グリークラブ三十～百年史」、同志社グリークラブ OB 会ホームページ

Doshisha College Song

Words by W.M.Vories
Music by Carl Wilhelm
Arr. by D.B.Towner

Allegro Maestoso



mf *cresc.*

1. One pur - pose, Do - shi - sha, thy name Doth sig - ni - fy one loft - y aim; To
4. Still broad - er than our land of birth, We've learned the one - ness of our Earth; Still

ff *mp*

train thy sons in heart and hand To live for God and Na - tive Land. Dear
high - er than self-love we find The love and ser - vice of man - kind. Dear

Al - ma Ma - ter, sons of thine Shall be as branch - es to the vine:
Al - ma Ma - ter, sons of thine Would strive to live the life di - vine:

pp *cresc.*

Tho' through the world we wand - er far and wide,
That we may with in - creas - ing years have stood

ff

Still in our hearts thy pre - cepts shall a - bide!
For God, for Do - shi - sha, and Broth - er - hood!

DOUAB

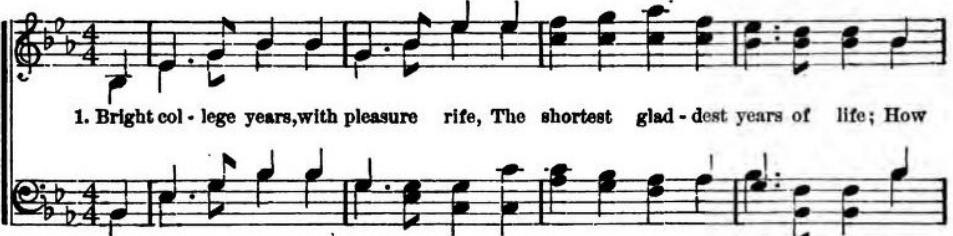
付図 1.同志社グリークラブが歌っている Doshisha College Song の楽譜（男声合唱）

DEAR OLD YALE.

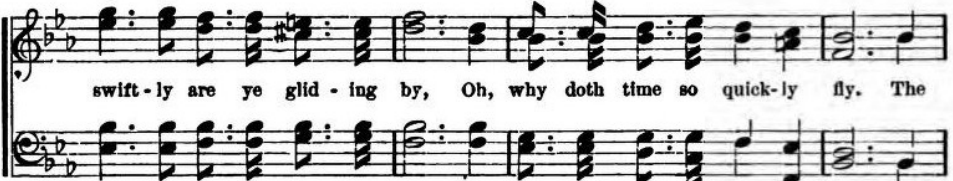
95

Words by H. S. DURAND, '81.

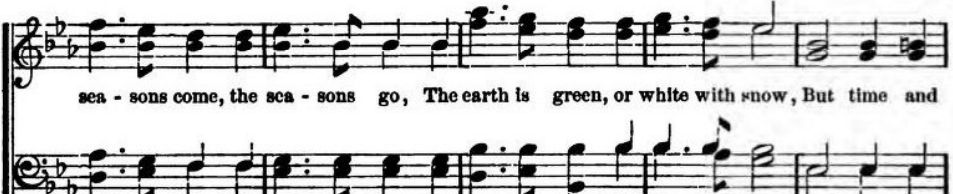
Music by CARL WILHELM.



1. Bright col - lege years, with pleasure rife, The shortest glad - dest years of life; How

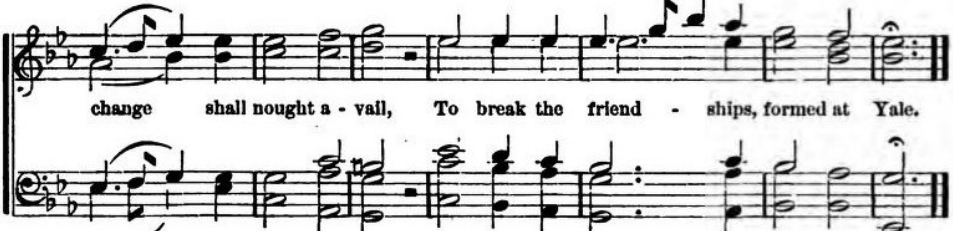


swift - ly are ye glid - ing by, Oh, why doth time so quick - ly fly. The



sea - sons come, the sea - sons go, The earth is green, or white with snow, But time and

To break, to break the friend-ships



change shall nought a - vail, To break the friend - ships, formed at Yale.

2

We all must leave this college home,
About the stormy world to roam;
But though the mighty ocean's tide
Should us from dear old Yale divide,
As round the oak the ivy twines
The clinging tendrils of its vines,
So are our hearts close bound to Yale
By ties of love that ne'er shall fail.

3

In after-life, should troubles rise,
To cloud the blue of sunny skies,
How bright will seem, thro' memory's haze,
The happy, golden, bygone days!
Oh, let us strive that ever we
May let these words our watch-cri be,
Where'er upon life's sea we sail:
"For God, for Country, and for Yale."

付図 2. 1882 年出版の Song Book に掲載されたエール大学校歌の楽譜

Bright College Years

H. S. Durand, '81

Carl Wilhelm
 Edited by
 Marshall Bartholomew

Maestoso
f Melody *mf* *p*

1. Bright col-lege years, with plea-sure rife, The short-est, glad-dest years of life; How
 2. In af-ter-years, should trou-bles rise To cloud the blue of sun-nyskies, How

mp

swift-ly are ye glid-ing by! Oh, why doth time so quick-ly fly? The
 bright will seem, through mem-ry's haze. Those hap-py, gold-en, by-gone days! Oh,

poco a poco cresc. *sempre cresc.*

sea-sons come, the sea-sons go, The earth is green or white with snow, But time and
 let us strive that ev-er we May let these words our watch-cry be, Wher-e'er up-

poco allarg. *ff*

To break, to break the friend-ships
 "For God, for God, for Coun-try,

change shall naught a-vail To break the friend-ships formed at Yale.
 on— life's sea we sail: "For God, for Coun-try, and for Yale!"

poco allarg. *ff*

Copyright, 1934, by G. Schirmer, Inc.
 International Copyright Secured

86143

付図 3. SONG OF YALE 16 版に掲載されているイエール大学の校歌
 "Bright College Years" の楽譜

39

tra - ra, tra - ra, tra - ra, tra - ra!
 ra, tra - ra, tra - ra, tra - ra, tra - ra!
 ra, tra - ra, tra - ra, tra - ra, tra - ra!

1. seit -
 2. o,
 3. das
 4. weiss

dem er das Mäg-de-lein sah, seit - dem er das Mäg-de-lein sah.
 Ja - ger, dein Liebschen ist da, o, Ja - ger, dein Liebschen ist da.
 Mäg-de-lein flü-ster-te: ja! das Mäg-de-lein flü-ster-te: ja!
 nicht, wie ihr ge-schah, weiss nicht, wie ihr ge-schah.

pp
 pp
 pp

W. Gerhard.

Die Wacht am Rhein.*

Karl Wilhelm.
 Allegro marcato.

1. Es braust ein Ruf wie Don-ner-hall, wie Schwertge-klirr und
 2. Durch Hun-dert-tau-send zuckt es schnell, und Al - ler Au-gen
 3. Er blickt hin-auf in Him-mels-auf, da Hel-den - vä - ter
 4. So lang ein Tro-pfen Blut noch glüht, noch ei - ne Faust den
 5. Der Schwur erschallt, die Wo - ge rührt, die Fah-nen flut-tern

ppp
 pp
 pp

* Mit Genehmigung des Eigentümers, Herrn G.D. Bäcker in Essen, aus Greif's
 Männerliedern. 12 Hefte à 30 Pf.
 Edition Peters. 7595

40

1. Wo-ge-prall: zum Rhein, zum deut-schen Rhein, wer
 2. bli-zen hell; der Deut - sche, bie - der fromm und stark, be -
 3. nie - der-schau'n, und schwört mit stol - zer Kam - pfes - lust: du
 4. De-gen zieht, und noch ein Arm die Bich - se spaut, be -
 5. hoch im Wind: am Rhein, am deut-schen Rhein, wir

pp
 pp
 pp

Ruhig.
 mf dolce

1. will des Stro-mes Hü-ter sein?
 2. schützt die hell' - ge Landes-mark,
 3. Rhein bleibst deutsch wie mei-ne Brust!
 4. tritt kein Feind hier deinen Strand!
 5. Al - le wol - len Hü-ter sein!

mf dolce
 mf dolce
 mf dolce

Va - terland, magst ru - hig sein: fest steht und treu die Wacht, die
 Wacht am Rhein! fest steht und treu die Wacht, die Wacht am Rhein!

pp
 pp
 pp

Max Schreckenhurger.
 7595
 Edition Peters.

付図 4. Die Wacht am Rhein (ラインの守り) の男声合唱の楽譜

火砲の雷

第十四 *Allegro maestoso.*

第十四 火砲の雷

- 一 火砲の雷を、矢玉の雨を、筑紫は満ちて、
わたり、わたり、国民は、わたり、国民日本男児は、
日本男児は、わたり。
- 二 我々十萬の雷、は、わたり、わたり、わたり、
わたり、わたり、国民は、わたり、国民日本男児は、
日本男児は、わたり。
- 三 矢玉、わたり、わたり、わたり、わたり、
わたり、わたり、国民は、わたり、国民日本男児は、
日本男児は、わたり。
- 四 雷を、わたり、わたり、わたり、わたり、
わたり、わたり、国民は、わたり、国民日本男児は、
日本男児は、わたり。

付図 5. 「火砲の雷」の楽譜（混声合唱）

墳墓の国

(い調四拍子)

allegro, maestoso. KARL WILHEIM作曲

5 | 1 3 5 5 | 3. 5 1 1 | 2 3 4 3 | 1. 7 7 |

1. イーホーヘーダダダ マンハダ アトセ
2. マンヨノトダニダ カヒセ ストセ
3. アメタチヒ ラケセト キヨリダ ヤタヤ

5 | 3. 3 2 2 | 1 1 | 2 - 0 7 | 6. 6 7. 1 7 6 | 5 - 0 |

エ エ ロハカ ハラ スーヤマトノヒトダダ
ダ マシヒカヘー テー アダマダマダマラ
ウ ケ エシガヤド ムー アレラセダミナ

mp 5 | 2. 1 7 7 | 1. 5 5 5 | 4. 4 3 3 | 3. 2 1 0 | 5 - 5 7 6 |

ア マノダ ニヤアア マノダ ニヤア イーカア
ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ
ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ

6. 7 1 1 | 1 - 2 - | 3 - 0 | 1 - 1 1 | 1. 3 3 4 | 3 - 2 - | 1 - 0 ||

ソレチダ スーレーン イーカア ソレチダ スーレーン
ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ
ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ ノ

付図 6. 「墳墓の国」の楽譜

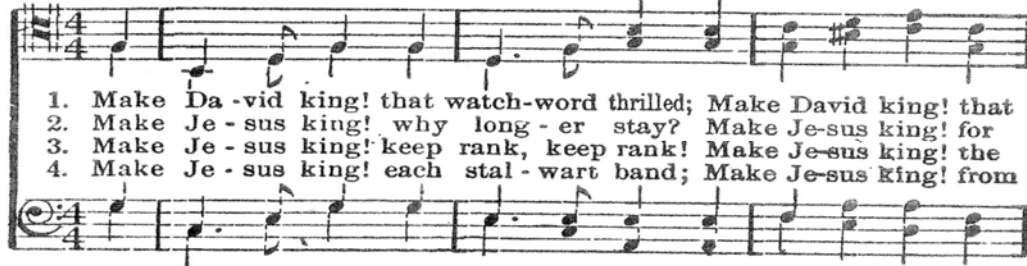
MAKE JESUS KING.

3

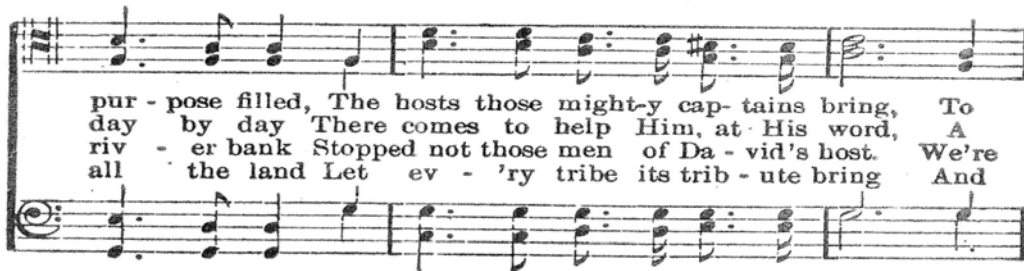
Written for the student's foreign missionary movement of the American Intercollegiate Young Men's Association, Northfield, Mass., 1888.

E. BROCK.

CARL WILHELM. ARR. D. B. T.



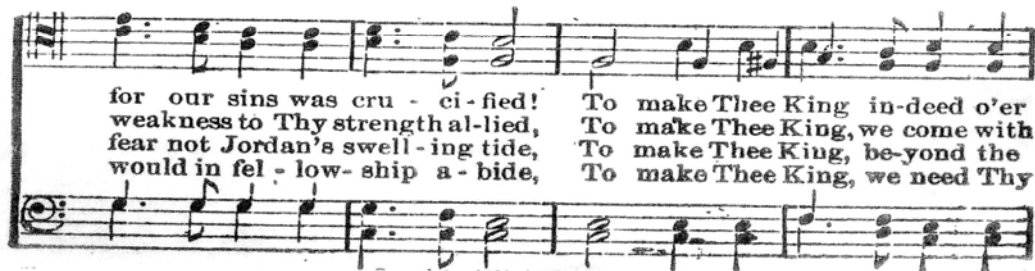
1. Make Da-vid king! that watch-word thrilled; Make David king! that
 2. Make Je-sus king! why long-er stay? Make Je-sus king! for
 3. Make Je-sus king! keep rank, keep rank! Make Je-sus king! the
 4. Make Je-sus king! each stal-wart band; Make Je-sus king! from



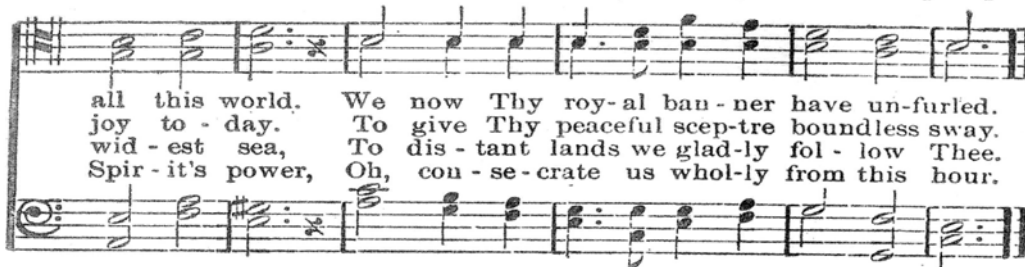
pur- pose filled, The hosts those might-y cap-tains bring, To
 day by day There comes to help Him, at His word, A
 riv- er bank Stopped not those men of Da- vid's host. We're
 all the land Let ev- 'ry tribe its trib- ute bring And



make their glorious leader king. Thine, Thine are we, and on Thy side. Who
 great host, like the host of God. Thine, Thine are we, and on Thy side. Our
 marshalled by the Ho- ly Ghost. Thine, Thine are we, and on Thy side. We
 haste to make the Savior King. Thine, Thine are we, and at Thy side, We



for our sins was cru- ci- fied! To make Thee King in- deed o'er
 weakness to Thy strength al- lied, To make Thee King, we come with
 fear not Jordan's swell- ing tide, To make Thee King, be- yond the
 would in fel- low- ship a- bide, To make Thee King, we need Thy



all this world. We now Thy roy- al ban- ner have un- furled.
 joy to- day. To give Thy peaceful scep- tre boundless sway.
 wid- est sea, To dis- tant lands we glad- ly fol- low Thee.
 Spir- it's power, Oh, con- se- crate us whol- ly from this hour.

付図 7. "Towner's Male Choir" P 3 に掲載されている"Make Jesus King"
 の楽譜 (男声合唱)